

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況（内規第 11 条 活動報告）

団体名	和	国際数学連合
	英	International Mathematical Union (略称 IMU)
	団体 HP (URL)	http://www.mathunion.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 (有) ・ 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>I. 途上国への関与</p> <p>IMU は 1970 年代初頭に、開発途上国における数学の振興に向けた組織的な第一歩を踏み出し、それ以来、様々な活動を支援してきた。</p> <p>2010 年、IMU は発展途上国委員会(CDC: Commission for Developing Countries) を設立し、発展途上国の数学と数学者を支援するための全ての主導権をまとめた。</p> <p>IMU が行う途上国への支援活動には、以下のものがある。</p> <p>1. 数学者のための助成金プログラム: 発展途上国委員会は IMU 未加盟国を含む発展途上国の数学者を対象とした助成金プログラムを通じて、発展途上国を拠点とする数学者の研究旅行や、発展途上国での数学研究会議を支援している。</p> <p>2. African Mathematics Millennium Science Initiative (AMMSI): サブサハラアフリカの数学センターのネットワークで、会議やワークショップ、客員講義、アフリカ大陸で博士号を取得している数学の大学院生のための広範な奨学金プログラムを組織している。</p> <p>3. Mentoring African Research in Mathematics (MARM): IMU はロンドン数学会(LMS)の MARM プログラムの設立を支援した。このプログラムは、イギリスの数学者とアフリカの数学者・学生間のメンタリング関係を通じて、サブサハラアフリカ諸国での数学とその教育を支援するものである。このプログラムは、個々の数学者と学生間の長期的なメンタリング関係を育成することに焦点を当てている。</p> <p>4. ボランティア講師プログラム(Volunteer Lecturer Program(VLP)): 開発途上国の若い数学者の育成に貢献することに興味のある数学者を登録する。このプログラムは、発展途上国の大学の学位プログラムで、上級学部または大学院レベルの 1 か月間の集中コースの提供を希望する数学者のボランティアのデータベースを管理している。IMU では、ボランティア講師を必要としている発展途上国の大学や数学の学位プログラムから、高度な数学の教育において生産的な協力関係を築くために必要な条件を提供するボランティア講師の募集も行っている。</p> <p>IMU はまた、国際数学教育委員会 (英語版) (ICMI) のプログラム、展示会、ワークショップなどで、特にアジアやアフリカなどの新興国での活動を支援している。実際、アフリカにおける数学の現状と数学的発展を支援するための新たな取り組みの機会についての報告書 Mathematics in Africa: Challenges and Opportunities (アフリカにおける数学: 挑戦と機会) を発表した。</p> <p>更に、IMU の発展途上国委員会(CDC)が報告書の更新版 “Mathematics in Africa 2014 Update”, ラテンアメリカやカリブ海諸国、東南アジアにおける数学に関する報告書 “Mathematics in Latin America report”, “The International Mathematical Union in the Developing World: Past, Present and Future” (開発途上世界における国際数学連合: 過去、現在、未来) を発表した。</p> <p>II. 女性数学者への支援 ; CWM (Committee for Women in Mathematics) の設立</p> <p>IMU は数学における女性の認知度を高め、あらゆるレベルと世界のあらゆる地域でのコミュニティにおける女性の代表を増やすことを目指して CWM を設立した。具体的な目標は以下の通りである。</p>	

	<p>1. 数学における女性のための国内組織と地域組織間の国際的な接触を促進し、特に地域または大陸レベルでのネットワークの構築を促進する。</p> <p>2. 世界中の数学における女性のための、そして女性に関する情報のリポジトリであるウェブサイトを提供し、女性数学者の国際的なコミュニティ間の効率的なコミュニケーションを可能にする。</p> <p>・2020年、CWMは35の申請を受け、そのうち8つのプロジェクトをサポートすることに決めた。そのうちの6つは、チリ、コロンビア、インド、セネガル、トルコ、ベトナム途上国で開催される会議であった。毎年5月12日を、早世したフィールズ賞受賞女性数学者・ミルザハニ氏を偲んで、“女性数学者の日”と名付けた。同年の5月12日には、2022年国際数学者会議 (ICM: International Congress of Mathematics) 開催予定地サントペテルブルクで、地元出身の女性数学の展示プロジェクトМАТЕМАТИКАを支援した。</p> <p>・2021年、CWMは23の申請を受け、そのうちCWMは6つのプロジェクトをサポートすることを決定した。CWMは、パンアフリカ数学者会議 PACOM 2021で同年の女性数学者の日のための AWMA の提案を支持した。またインドの女性数学者によって提案されたプロジェクトと、ラテンアメリカとパキスタンでの2つ女性数学者会議の開催も承認された。</p> <p>・2022年、CWMは31の申請を受け取り、そのうち10をサポートすることに決定した。CWMは、AOWM(数学におけるアジア・オセアニア女性)のプラットフォームのウェブサイトの作成と AWMA(アフリカ数学女性協会)のウェブサイトの更新を支援した。更に、3つの地域会議、タジキスタンの第3回中央アジア数学女性会議、ナイジェリアでの第2回セージ女性会議、オアハカ(メキシコ)での数学とジェンダーに関するワークショップの開催を支援した。</p>
<p>当該国際学術団体の対応する分野の学術の進歩に貢献した事例</p>	<p>IMU: International Mathematical Union は、数学分野における国際協力を目的とした国際非政府組織である。国際学術会議(ISC)の構成機関であり、国際数学者会議(International Congress of Mathematicians(ICM))を主催している。</p> <p>会員は、80か国以上の各国の数学団体が構成されている。IMUの目的は、数学の国際協力の促進、ICM やその他の国際科学会議の支援・助成、科学賞の授与による数学への卓越した研究貢献の承認、純粋・応用・教育の各側面において数学科学の発展に貢献すると考えられるその他の国際的な数学活動の奨励・支援である。</p> <p>1. 国際数学者会議(ICM)</p> <p>国際数学者会議 (ICM) は、数学界最大の会合であり、4年に一度国際数学連合の主催により行われる。万国数学者会議とも称される。開会式では、フィールズ賞、ネヴァンリンナ賞 (2022年よりアバカス・メダルに改称)、ガウス賞、チャーレン賞が授与される。ICMでは、会議の主催者により選ばれた著名な数学者による1時間の全体講演約20件と、45分間の招待講演約170件が行われる。更に、参加者による各15分間の発表がある。ICMの参加者は約5,000人である。会議ごとに、招待講演に基づく学術的な論文を含む議事録(プロシーディングス)が刊行される。</p> <p>2. 顕彰事業</p> <p>・フィールズ賞 (1936年創設)</p> <p>数学に関する賞では最高の権威を有する。しかし若い数学者の優れた業績を顕彰し、その後の研究を奨励することが目的であり、「4年に一度」「40歳以下」「2名以上4名以下」という制限がある。日本人の受賞者は、小平邦彦 (1954年)、広中平祐 (1970年)、森重文 (1990年) の3人。</p> <p>・ネヴァンリンナ賞 (1981年創設)</p> <p>計算複雑性理論、プログラミング言語の論理、アルゴリズム解析、暗号理論などに代表される情報科学の数学的側面における優れた貢献に対して授与される賞である。フィールズ賞と同様に若手の数学者を対象としており、40歳未満の数学者のみが対象となっている。</p> <p>・ガウス賞 (2006年創設)</p> <p>フィールズ賞など、一般に数学の賞は純粋な数学的業績(数学分野への貢献)を</p>

	<p>評価するのに対し、ガウス賞はそれが実際に社会的な技術発展など、数学分野以外に与えた影響・貢献を評価する。例えば第1回の伊藤清の受賞理由である確率微分方程式は、金融工学及び経済学の発展に多大な影響を与えたものである。</p> <p>そのため、実社会に広まる時間差を考慮して、フィールズ賞やネヴェンリンナ賞に見られる受賞資格の年齢制限はない。</p> <p>・チャーン賞（2010年創設）</p> <p>生涯にわたる群を抜く業績を挙げた数学者に贈られる。チャーン賞は、幾何学において多大な貢献をした陳省身を記念して創設された。日本では柏原正樹（2018年）が受賞している。</p>
<p>政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について</p>	<p>1. 数学と諸科学・企業の連携研究拠点の構築</p> <p>数学と他の学術分野および企業との連携研究推進の中核となる「数学連携推進センター」を新たに設立し、数学の専門家を雇用して、全国の数学・数理科学者と他分野・企業を繋ぐ数学連携研究を推進して我が国の研究力を強化する。</p> <p>第5期科学技術基本計画において数学・数理科学は、未来の産業創造と社会変革のための共通基盤を支える横断的な科学技術と位置づけられ、各技術との連携強化や人材育成の強化に留意しつつ、その振興を図ることとされている。数学・数理科学を深化させるとともに諸科学・産業との連携を着実に展開するために、数理科学の研究機関が連携したネットワーク型の研究拠点を形成する。数学・数理科学の諸研究活動を諸科学・産業から目に見える形で継続的に実施するためには、個々の組織の活動だけでは限界があり、全国の研究拠点を有機的に組織化したネットワーク型の研究推進基盤を構築することが効率的である。数学・数理科学のフロンティア探索とともに数学へのニーズの発掘からイノベーションへつなげるため、既存の各種プログラムの大幅な機能強化と新しい取り組みを開始する。</p> <p>具体的には、社会的に喫緊の課題に対して研究プロジェクトを立ち上げ、諸科学・産業と連携して問題解決に取り組む。ネットワーク型の多様性と柔軟性を活かすことにより、諸科学・産業からの逆インターシップや共同研究のスタートアップ等を効果的に実現する。このプロジェクト研究推進において、イノベーションに必要な人材の育成を行う。更に、この研究拠点形成においては、国際的研究動向を把握しフロンティアを形成するハブとなる訪問滞在型研究プログラムを実施する。日本の優位性を活かし、長期的な発展を確保しつつ新分野開拓の先頭を走るためにも、長期訪問滞在型研究施設の設置は必須である。</p> <p>既存の施設を活用し、特定の課題・テーマのもと関係者を招聘し中長期滞在型プログラムに参画させる。更に分野横断型連携研究の推進と国外との連携事業などを積極的に推進するために、中核研究機関主導による「数理科学連携推進センター」を設置することで、数学・数理科学の世界動向を先導し Society5.0 を実現すべくフロンティアを拓く。</p> <p>2. データとAIの時代への数理科学</p> <p>今世紀に入ってから数理科学研究は、前世紀の抽象化形式化の成果を、諸科学や産業の具体的な問題の研究、特に社会の課題の解決に応用していくことに向かっている。近年、社会や産業の構造の変化は加速し、AI技術が急速に発展している。その中で、データ等からは単純な構造が見いだせないような複雑な現象の中に、何らかの数学的構造を見いだすこと、AIの動作過程の理解などにおいて、数理科学への大きな期待がよせられている。諸科学・産業との連携のためには、議論の内容の相互理解も共通の目標を持つことも欠かせない。数理科学の分野の中には応用を意識して生まれたものも多いが、それらの分野においても、基礎となる数学は応用を意識せず純然たる知的好奇心から生まれたものであることが少なくない。これが数理科学の汎用的な力を生み出す源泉ともなっている。</p> <p>そこで、データとAIの時代とされる現代そして未来の社会のための数理科学の新たな展開と深化およびそれを推進する組織・機関の構築と予算について、早急を実現することを提言したい。</p> <p>3. アジア太平洋地域における数理科学と諸科学の融合研究に関する国際頭脳循環ハブ機能の構築</p> <p>数理科学研究における「出会いと議論の場」は欧米を中心に発展しており、世界</p>

	<p>の数理科学コミュニティは欧米の二極を中心に国際頭脳循環を行っていると考えられる。他方、未だ欧米に匹敵する数理分野の国際頭脳循環の場が確立していないアジアにおいては、近年、中国が急速に存在感を増しており、伝統的にアジアにおいて数理科学をリードしてきた日本の存在感は相対的に低下している。</p> <p>このような状況下で、我が国主導でアジア太平洋地域における開かれた国際頭脳循環の場を提供することは、その研究力を活かして透明性・公平性の高い研究交流を促進し、同地域の発展に学術面から貢献するのみならず、その成果をアジア太平洋地域における共通課題や持続可能な開発目標（SDGs）課題の解決、科学技術を通じて実現すべき未来社会像をめざすための新たな価値の創造等につなげることを通じて、我が国の国際的な存在感を維持・発展させていくことに寄与するものと考えられる。また、欧米に比べて公開情報に乏しいと言われるアジア太平洋地域における数理関係情報の収集・蓄積・発信等を行い、情報ハブとしての役割を果たしていくことも効果的であると考えられる。なお、このような活動を実施するにあたり、課題や情報をどの国と共有するのか等の方針については、学術コミュニティのニーズの視点と同地域の国際情勢や地政学的な文脈を踏まえた戦略的視点とのバランスにも留意することが必要である。そのような観点からも、我が国の数学コミュニティがIMUの活動に積極的に関与することは意義深い。</p> <p>具体的には、歴史的に主導的立場にあった我が国の数理科学力を活かし、欧米と並ぶ数理科学分野の第三極を形成すべく、アジア太平洋地域を中心とした高度な数理系人材・研究組織をつなぐ国際頭脳循環のハブとなるべく、数理科学と諸科学・社会との協働のプラットフォームとしての機能を果たす数理・融合研究に関する国際的な場（フォーラム）を設立する。フォーラムに集う国際的に著名な研究者や異分野の研究者との交流、産業界等との社会的ニーズを踏まえた協働により、</p> <p>①数理科学研究の強化や新たな数理・融合領域研究領域の開拓・創出 ②我が国の数理人材の視野・関心・経験値の拡大による「俯瞰的数理人材」の育成、国際的なコミュニケーション能力及びネットワーク形成能力の育成に貢献する。</p> <p>当該フォーラムを活用し、数理科学における研究形式として国際的な潮流である滞在型研究及びPBL型研究(国際的産学連携)を海外研究者とともに実施することにより、我が国及び同地域共通の社会的課題やSDGs課題の解決、研究力の向上・人材育成、産業界等の抱える問題の解決等に寄与する。フォーラム機能の一つとして、アジア太平洋地域の数理関連動向の情報収集・調査や独自の雑誌等の発刊による情報発信や広報、このような活動に貢献する同地域の若手研究者の顕彰等も行う。</p> <p>4. 世界の女性数学者の育成</p> <p>女性数学者委員会(Committee for Women in Mathematics(CWM))は、世界中の女性数学者に関する問題に取り組んでおり、ICMのサテライトイベントとして、女性数学者のための世界会議(WM²)を開催している。また、電子情報通信委員会(Committee on Electronic Information and Communication(CEIC))は、数理情報、通信、出版に関する事項についてIMUに助言を行い、双方で「数理資本主義」の到来に備えている。</p>
<p>日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて</p>	<p>1. ICMにおける受賞及び招待講演, IUMの総裁, 副総裁</p> <p>日本は1954年に小平邦彦教授がアジア人として初のフィールズ賞を受賞して以来、アジア最多の3名(小平邦彦氏の他、広中平祐氏(1970年)森重文氏(1990年))とともに、第1回のガウス賞伊藤清氏(2006年)、チャーン賞柏原正樹氏(2018年)の受賞に象徴される様に、数理科学分野の数多くの国際的な賞の受賞者を輩出してきた。1990年にはアジア初のICMの開催、2015年にはアジアから初の森重文氏のIMU総裁就任など、長年アジア太平洋地域における数理科学研究において中核的存在感を示してきた。なお、IMUの日本人の副総裁は、柏原正樹氏、永田雅宜氏、森重文氏の3名である。</p> <p>また1897年にICMが始まって以来、日本人の全体講演者は、伊原康隆氏、角谷静夫氏、柏原正樹氏、加藤和也氏、加藤敏夫氏、佐藤幹夫氏、中島啓氏、深谷賢治氏、三輪哲二氏、望月拓郎氏、森重文氏の11人である。全体講演者ではない</p>

が、志村五郎氏は招待講演者として4度、広中平祐氏、岩澤健吉氏、荒木不二洋氏は招待講演者としてそれぞれ2度、小平邦彦氏は招待講演者として1度招聘されている。

また最近の ICM での招待講演者は以下通りである。

2022年 バーチャル

市野篤史氏、入谷寛氏、緒方芳子氏、加藤周氏、ブノワ・コリンズ氏、中西賢次氏、舟木直久氏、横山啓太氏

2018年 リオデジャネイロ

荒川知幸氏、伊山修氏、河東泰之氏、儀我美一氏、立川裕二氏、藤原耕二氏

2014年 ソウル

熊谷隆氏、辻井正人氏、平地健吾氏、小木曾啓示氏、戸田幸伸氏

国民の数学的リテラシーについても、義務教育終了段階では先進国においても日本は世界トップクラスであり、国際数学オリンピックの受賞者数などにおいてもアジアをリードしてきたことから、元来のポテンシャルは極めて高いと言える。

2. 2022年国際数学会議に関連する日本フォーラムの開催

・日時：

2022年6月13日（月）、6月14日（火）

・会場：

京都大学数理解析研究所

・概要：

国際数学会議 (ICM) は、国際数学連合 (IMU) による最も重要な活動であり、4年に一度開催される世界の数学界における最大の会合である。ICM では、数学のノーベル賞とも称されるフィールズ賞をはじめとして、ガウス賞、チャーン賞、リーバティ賞、ネーターレクチャー等の表彰が催される。また会期中には、数学、数理科学の広い範囲を対象とし、全体講演と招待講演が企画・実施され世界トップレベルの研究成果が発表される。この ICM は 2022年7月6日～14日にロシア・サンクトペテルブルクで開催予定であったが、IMU は3月初旬に急遽現地開催を中止し、すべてバーチャル形式で実施すると発表した。そこで、日本学術会議数理科学委員会・IMU 分科会と日本数学会は、ICM2022 における日本の数学および数理科学のアクティビティを世界にアピールするために、急遽、研究集会を共同開催することとした。具体的には ICM 日本人招待講演者を、我が国の国際共同拠点である数理解析研究所に招聘し、ハイブリッド形式で講演会 (= 研究集会) を開催する。更に対面での講演・討論の様子をライブと録画の両方で配信し、日本全国と世界の研究機関に向けて我が国の数学・数理科学の研究成果を情報発信する。

・具体的な計画：

ICM2022 は、2022年7月5日～14日の予定で、当初の対面形式でのプログラムの日時を踏襲する形式でオンライン配信される。そこで、日本の研究機関に所属する招待講演者8名を本計画研究集会の講演者とし、2022年6月13日（月）、14日（火）の2日間で開催する。国際的に我が国の数学の発展をアピールする観点から、使用言語は英語とする。現時点では対面開催を基本とし、オンライン配信をも可能とするハイブリッド形式を併用する。講演はすべて録画しホームページを作成し公開予定である。またビデオ・アーカイブとして、数理解析研究所と日本数学会が保管する。

・プログラム：

<https://www.mathsoc.jp/activity/meeting/JapanForum2022/> (ICM Satellite Events

Regional events

Japan forum associated with ICM 2022, RIMS Kyoto, June 13-14 2022)

<https://www.hairer.org/ICMSCG/>

に掲載。

・注：

	2022年国際数学者会議に関連する日本フォーラムは、ICMのサテライトコンファランスとして正式に認可された。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて	<p>IMUは、数学分野における国際協力を目的とした国際学術会議(ISC)の構成機関である。会員は80か国以上の各国の数学団体が構成され、数学界で最も重要な国際イベント国際数学者会議(ICM)を主催している。日本学術会議が加入することにより、国際的および国内的な数理学の振興、普及および社会貢献に寄与できる。また、最高位のグループ5の会員として参加することで、予算や活動に対する日本の意見や、総会へ派遣評議員の決定に大きな影響力を持つ。更にIMUに関する役員等の推薦、フィールズ賞、ガウス賞などの各賞の受賞者の推薦、国際会議等への代表の派遣に対して日本学術会議数理学委員会・IMU分科会が主導権を発揮することで、我が国の数学の地位が向上し、国民に希望と夢を与えることができる。国際会議等を日本で開催・招致に関して優位に立つことで、我が国が数理学分野で国際的拠点としての地位を確立することに繋がる。</p> <p>実際、数理学研究における「多様かつ優秀な研究者との議論(研究会等)」は、他の実験科学分野における「実験」に匹敵する重要な研究活動であるため、研究力強化のインフラとして、適切な「出会いと議論の場」を整備することが必須である。欧米には、世界中から多様な研究者が集う国際的に著名な国際頭脳循環拠点やネットワークがそのような「出会いと議論の場」として多数存在する。そうした場は、基礎から応用、更には産業界等まで巻き込んだ幅広い数理関連コミュニティを形成させる場ともなっており、こうした場が新たな研究意欲を刺激することで研究力の強化に貢献しているとともに、数理学のみならず、実験科学的手法による研究を行う分野や社会科学等を含む他分野との学際的な数理・融合研究の創出にも寄与している。また、産業界等の社会的なニーズとの接点の機能も果たしている研究所も数多くあり、それが欧米における応用志向の数理学研究の発展の一助となっていると考えられる。我が国の数理学における研究力の強化のためには、このような国際的に求心力のある「出会いと議論の場」を提供するIMUに積極的に関与し、本分科会がイニシアティブをとる形で理事会、総会、プログラムを企画・運営し、欧米に匹敵する国際頭脳循環の仕組みを構築・整備していくことが求められている。</p>
その他(若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)	<p>IMUは国際数学教育委員会(英語版)(ICMI)のプログラム、展示会、ワークショップなどで、特にアジアやアフリカなどの新興国での活動を支援している。</p> <p>2008年にアフリカにおける数学の現状と、数学的発展を支援するための新たな取り組みの機会についての報告書</p> <p>“Mathematics in Africa: Challenges and Opportunities”(アフリカにおける数学: 挑戦と機会)を刊行した。2014年に、IMUの発展途上国委員会(CDC)が報告書の更新版を発表した。更に、ラテンアメリカやカリブ海諸国、東南アジアにおける数学に関する報告書も発行した。</p>

2 今後の予定について(内規第11条 活動報告)

総会、理事会の日本開催の予定について(招致等の予定も含め)	ICIAM2023 Tokyo(応用数理国際会議)開催が決定している。
日本人の役員立候補等の予定について	中島啓(東大教授、日本学術会議数理学委員会・IMU分科会委員)氏がIMU次期総裁に内定している。任期は2023年~2026年。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	ICM(国際数学者会議)の日本への誘致を検討中。

3 国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条 活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去5年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2018年(開催地:サンパウロ), 2022年(開催地:ヘルシンキ)		
	理事会・役員会等開催状況	2018年(開催地:サンパウロ), 2022年(開催地:ヘルシンキ)		
	各種委員会開催状況	2018年(開催地:サンパウロ), 2022年(開催地:ヘルシンキ)		
	研究集会・会議等開催状況	2018年(開催地:リオデジャネイロ), 2022年(開催地:ヘルシンキ)		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	<p>2018年, IMU 総会(サンパウロ), 7人(うち代表派遣:坪井俊氏, 小谷元子氏, 小澤徹氏, 小菌英雄氏, 清水扇丈氏)</p> <p>2018年, ICM(リオデジャネイロ) 7人(チャーン賞受賞:柏原正樹氏, 招待講演者:伊山修氏, 藤原耕二氏, 荒川知幸氏, 河東泰之氏, 儀我美一氏, 立川裕二氏)</p> <p>2022年, IMU 総会(ヘルシンキ), 6人(うち代表派遣:小澤徹氏, 齋藤政彦氏, 伊藤由佳理氏, 小菌英雄氏, 清水扇丈氏)</p> <p>2022年, ICM(オンライン) 8人(招待講演者:横山啓太氏, 加藤周氏, 市野篤史氏, 中西賢次氏, 緒方芳子氏, 舟木直久氏, ブノワ・コリンズ氏, 入谷寛氏)</p>			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	総裁	2015～2018	森 重文	() 会員・連携
	理事	2019～2022	森 重文	() 会員・連携
	CWM 拡大委員	2019～2022	小谷元子	(24期) (会員)・連携 (25期) 会員 (連携)
出版物	<p>1 定期的(年6回) 主な出版物名 IMU News</p> <p>2 不定期(4年に一度) 主な出版物名 Proceedings of the International Congress of Mathematicians</p>			
<p>活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 http://www.mathunion.org/membership/imu-bulletins</p>				

4 国際学術団体に関する基礎的事項（内規第3条、4条、5条）

国内委員会 （内規4条第3号）	委員会名	IMU 分科会
	委員長名	小藺英雄
	当期の活動状況	<p>（開催日時 主な審議事項等）</p> <p>第1回令和3年1月5日 14:10～15:20</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員長の決定，役員選出 ・報告事項，引き継ぎ事項 ・今期の計画 <p>第2回令和3年5月7日 13:00～14:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新委員の紹介 ・2022GA 代表団の決定と事前打ち合わせ ・IMU 委員会への日本人委員の推薦 ・ICM2022 における Japan Forum の準備
内規第3 （国際学術団体の要件関係）	<p>国際学術交流を目的とする非政府かつ非営利的団体である</p> <p>①. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (https://www.mathunion.org/organization/statutes)</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）</p> <p>①. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (https://www.mathunion.org/membership/imu-membership)</p>	
	<p>下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）</p> <p>㉞ 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
	<p>10 カ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p>①. 該当する 2. 該当しない</p>	
	加入国数及び主要な各国代表会員を10 記載	<p>(87ヶ国)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各国代表会員名／国名 National Research Council of Canada (Canada) Chinese Mathematical Society (China) Comite National Francais des Mathematiens (France) Deutsche Mathematiker-Vereinigung (Germany) Israel Academy of Sciences and Humanities (Israel) Istituto Nazionale di Alta Matematica(Italy) Science Council of Japan(Japan) London Mathematical Society(United Kingdom)

		U.S. National Academy of Sciences (USA) Korean Mathematical Society (Republic of Korea)
--	--	--